

原始・古代の別府

賀川光夫

一、縄文式文化

鶴見山麓から別府湾に至る扇状原には縄文後期の土器を包含する遺跡が点在する。その主な遺跡は実相寺春木遺跡^Aに於ける小貝塚をともなう西平式土器^①を包含層であり、他は南石垣遺跡で御領式土器^②を包含するものである。前者は昭和二十六年以来国際観光道路開通工事に際して発見されたもので小貝塚と土器包含層からなり、夥しい土器片と共に石器類の発見も相当数にのぼった。他に獸骨類の出土もあつたが工事中のため採集すら出来ない状況で、遺跡の大部分は破壊されてしまった。採集された遺物は主として鈴木栄氏によつて保存されているが別府市に於ける縄文遺跡と遺物の具体的資料となる唯一のもので貴重である。南石垣遺跡からはかつて御領式土器と土偶が発見されたと云われる程度で、現在も相当広い地域に御領式土器片の散布が見られる。

鶴見山麓一带の高原にも縄文式土器の出土を聞くが、具体的資料として東山地区より発見された縄文前期塞神式土器^③片一を得たに過ぎない。この資料は現浜脇中学教官藤内喜六

の採集によるものであるが包含層の確認はされていない。氏かし縄文土器中が単独に発見される理由はないので、有力し遺跡を東山地区に想定することは可能である。

な以上別府市に於ける縄文式土器の発見によりこの地に数千年の太古より人類の営みを認めることが出来るのである。しかしこの総合的な調査研究は今後のことであり、更に多くの資料が発見され検討されることにより今後に期待しよう。

(注)

- ① 西平式土器：熊本奥西平貝塚発見の土器を標式したもので山形に隆起した口縁部を有し線文と磨消縄文を施して加飾した、鉢壺形土器である。
- ② 御領式土器：熊本奥御領貝塚発見の土器を標式したもので、口縁部「く」字形を呈する浅鉢形又は鉢形を主とする土器である
- ③ 塞ノ神式土器：鹿児島奥塞ノ神遺跡より発見された土器を標式したもので朝顔状に開いた円筒土器で爪形文、列点文、燃糸による網状文等で加飾する前期の縄文式土器である。

二、弥生式文化

別府市に於ける弥生式遺跡は非常に多く、住居址群・墓地

群・土器包含層等に大別される。住居址群として最も注目されるのは、先に西平式土器を出土した実相寺春木遺跡Aに隣接した実相寺春木遺跡Bである。この遺跡はA同様観光道路工事に際して発見されたもので合計一五に及ぶ弥生式時代の住居址が発見された。それらは竪穴式住居・平地住居が半ばし、厚い火山灰土層に覆われていた。昭和三十一年春、一部を発掘した住居址の状態を把握することに成功したが、大部分は工事中に破壊された。この住居址群に近接して甕棺や石棺が発見されたが、その中には、甕棺の外部施設として河石を小口積した一種の櫛を作り、その上位を板石一枚で蓋とした注目すべきものも発見された。合口甕棺数組が発見されたのは別府大学校庭工事の際である。土器包含層の主なもの別府大学周辺の円通寺遺跡で、口縁部く字形に内彎し、その部位に櫛目波状文^①(櫛目文土器)を施した壺形土器が多く、安国寺遺跡等より発見された弥生式後期の土器と対比される。

これらの遺跡は規模も非常に大きく学術的調査を行えば相当の成果を得られんと考えている。いずれも工事中に発見されたものであるため遺跡の状況が明らかでないのは残念である。

(注)

① 櫛目文土器：壺形をした土器の口縁部に「タガ」状の文様帯を

つけ、これに櫛歯を上下し乍ら横走刻印して施文する波状文は西瀬戸内海一帯の弥生式後期の土器を広くもちいられるものでその代表的なものが安国寺式土器である。

三、古墳文化

別府市の遺跡の中で最も古くから知られているのは北石垣の鬼ノ岩屋古墳であらう。その一例として帆足万里の肄業餘稿卷二(万里全集)に

本藩速見郡石垣村有俗号鬼窟者二、皆墨大石為室一門僅容如隧道状窟内可布数席、蓋以丈餘大石、其上生小竹、望之如古塚然、度非数百人之力不能成、予以為、此上古時、西師有力者葬埋之地、後人發之、取其所藏也、數年前、本藩郊外民、掘地過古塚、以石為櫛、其藏化盡、只有如朱少許以石為櫛、蓋本邦古時之制也

との一文がある。本県に於ける考古学史上最始の注意すべきものとして興味深い。

この古墳はその後昭和の初期故鳥居龍藏、京都大学名誉教授梅原末治両博士の調査を経て、昭和二十六年筆者の文化財指定に関する調査となり、最近文化財保護法の規定により史蹟として指定されるに至つた。鬼ノ岩屋と通称される二基は鳥居博士が石櫛式古墳と云つているが、横穴式石櫛を有するもので、その一基は二室奥壁に厨子形の主体部構造がある。

他の一基は単室巨大な石室で奥壁にそい祭壇用の石が存する。尚鬼ノ岩屋出土と称する祝部式土器類数点が別府市公民館に所蔵されているが、これは疑わしい。

鬼ノ岩屋以外の高塚としては実相寺山麓に太郎・次郎塚と称する墳形の盛土がある。その附近に鷹塚が存在するが、これを一群とした古墳が附近一帯にあつたものと考え。その具体的資料として、附近の原野に巨大な舟形石棺の一部が現存している。この他別府大学周辺や、南石垣附近より組合式石棺が相当発見されているが、いずれも耕作の際の発見で調査の対象となっていない。

別府市南部山麓には浜脇字平原、芝尾に二十四穴、金比羅山に二十六穴の横穴群が存在する。この横穴群中の遺物は浜脇修福寺に保存されている。

おわりに

以上別府市に於ける縄文文化・弥生文化・古墳文化の順に主として遺跡の所在を記して見た。それによれば高塚式古墳を除いた他の遺跡は厚い火山灰によつて覆われているので、土木事業や耕作等による発見以外遺跡を見い出すのは困難であるが、その数は非常に多い。この地が太古より人の住いに適したのであるうか、今後はそれぞれの時代に就いて遺跡・遺物の内容を究め太古に於ける社会が如何にあつたかと云う

問題を検討しなければならない。病臥中であつたため思うにまかせず単に遺跡の概要を記したのみで、この点御了解願ひ度い。

(別府大学助教授)